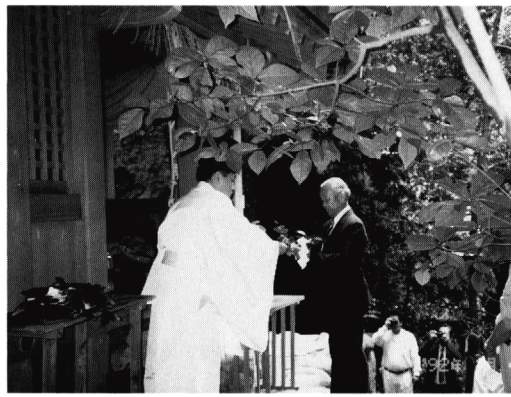




発行所 社会 毎月十五日 大 像 像 811-35 福岡県宗像郡玄海町 電話 0940-62-1311(内) 定価 一年送料共 1000円

沖津宮現地大祭斎行

初夏の陽光を浴びながら



境内は埋め尽くされたが、祭典が開始されると辺りには水を打った如く静りかえつた。

その後、兼父宮より渡鳥意義の説明がなされ、また各班毎に分れ担当神職による諸注意、諸事項の説明が行われた。

翌十七日、祭典当日の午前六時、参拝者ら全員が各班毎大鳥漁港に集合し、各人の高鳴る胸を涼しげな潮風がおさえてゆく。好天のもと、先ず海上保安庁の灯台廻り船「げんらん」が出港。関係者に見守られ、次いで、同巡視艇「しづかめ」、大島村渡船「しおがせ」、漁業関係者による奉仕船三隻が沖ノ島に向け次々に大島を後にした。

当日は雨が心配されたが、海上穏やかな好天に恵まれた。約二時間の航海の後、水平線上に沖ノ島の鳥影が浮かぶ。一同、感慨の声を上げた。午前八時三十分頃、

全奉仕船が沖ノ島に接岸、参拝者一同は、沖ノ島上陸の定めの一つである海水での裸を直ちに行い、荒々しくそびえる山影に、改めて神の島である事を実感した。冷たい海水にて身心を浄めた一同は四百段に及ぶ急斜面の参道石段を進み、山の中腹に鎮まり坐す沖津宮本殿の前に参列した。

午前十時、原生林が頭上を覆い巨岩に囲まれたその聖域に大鼓の音が鳴り響き、兼父宮司以下神職五名奉仕のもと祭典開始。神前には神饌、御神酒、御神水が多数お供えされた中、兼父宮司が日本海々戦に命を賭して国の為に戦った人々の栄誉を称え、国家皇室の安泰と国民の幸福を祈る祝詞を奏上した。

次に宮司に続き日原沖・中西宮奉賛会々々を始め、各県の代表者が玉串を神前に供え、敬虔なる祈りを捧げて、祭典は滞りなく終了した。

祭典終了後、宮司挨拶に続き当社松本委員により沖津宮の祭祀遺跡等の説明が行われた。参列者一同、古代から連続と続く祭祀場の神秘的な空気に触れ、古くより続けられる祭儀に敬

神の念を新にした。鳥の波止場に於ては沖・中西宮奉賛会の方々により真心のこもった新鮮な海の幸の刺身や煮魚が用意され、一同輪になって集い、沖津宮を参拝出来た喜びを噛み締めながら、神和楽の直会を楽しんだ。

午後一時三十分、参拝者を乗せた各奉仕船団は沖ノ島を離れ、島の周囲を一周しその壮大な景観を目に焼き付け帰途についた。沖津宮を参拝するという目的のもと、見ず知らずの者同士が一同に会し、家路につく頃には、またの再会を誓いあい、ここに本年の現地大祭は盛大裡に終了した。

去る五月十九日、午前十時より宗像大社氏子会総代会が、当社前の玄海町文化施設「アクシス玄海」講堂にて開催された。

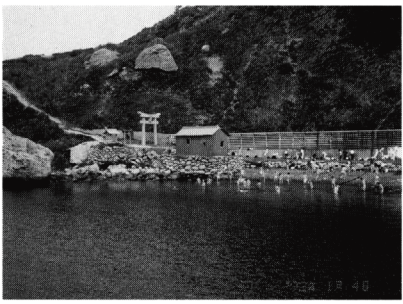
例年、総代会は、当社清明殿に於て開催されているが、現在改修工事中の為今回は「アクシス玄海」での開催となった。

当日は、昨夜来の雨が残る生憎の天気となったが、宗像市・郡より選出された評議員・総代の方々百三十名が出席された。

会議に先立ち、午前九時五十分より、出席者一同本殿に於て正式参拝を執り行い、出光氏子々々長の玉串拝れに合せ参拝を行った。

会議は、大森副会長の開会の辞に始まり、出光宮長兼父宮司の挨拶の後、議案の審議に入った。

先ず最初に、平成七年度氏子会決算報告並びに事業報告が事務局より、監査報告が福岡町の監事桶田繁男氏より行われ、質疑応答の



井筒

神具・装束 株式会社 福岡県博多区東公園二一三(平野) 電話 福岡(093)51-1945(六番) 本店 京都市下京区油小路六条北(平野) 電話 京都(075)341-1111(一) 電話 三三三三三三(一) 電話 三三三三三三(一)

氏子会総代会

後、議案は承認された。ついで、平成八年度氏子会算案並びに事業計画案を発表、慎重に審議され原案通り可決承認された。

次に、平成八年度氏子会費取りまとめ依頼の件について説明を行い、各地区総代の皆様の協力をお願いした。

次に、津屋崎町の南海副会長退任に伴い空席となっていた副会長の役員改選が行われ、津屋崎町勝浦地区評議員の島田光男氏が推され、拍手をもって承認、副会長に任命された。

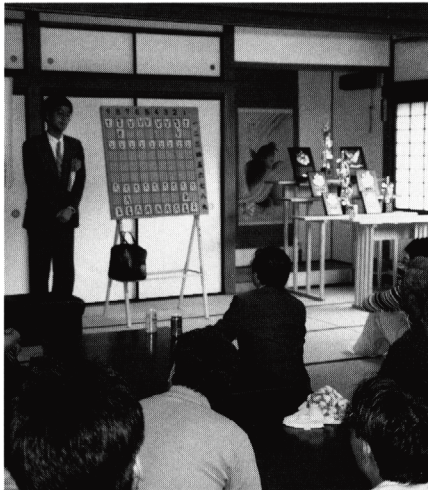
ついで、平成八年度氏子会評議員並びに総代委嘱状の伝達式が行われ、総代評議員を代表して福岡地区宮司より委嘱状が手渡された。

最後に、東郷地区評議員の坂本守正氏の首領で万歳三唱を行い、倉元副会長の閉会の辞を以て氏子会総代会は無事終了した。



第四二〇回 宗像大社歌会詠草

- 福岡東 岩男 巨ふるまの土のつきたる筈が宅便にて今年も届く
- (評) 平易に詠い起こして、作者には土の付いた筈は故郷と季節の象徴ですらあるようだ。読む側も楽しい気分となる。
- 徳重 石松や寿子今宵また霜くる気配ハウスから田に植へられし早苗を案す
- 田野 森 甲子の氣力に手伝ふ母指詰
- 田野 森 甲子の氣力に手伝ふ母指詰
- 原町 八波 五月五十年忌修する姉の墓処より三山の雪の峯見ゆ
- 河東 薄 かほる大きな春の蚊打らぬ掌のじんじんとして斑に赤し
- 池田 小田 イセ遍路の幼子の背に書かれたる同行一人われの目に沁む
- 朝野 藤井 浩子國道の家並とせしひととこ早苗の上雲雀鳴る
- 土穴 瀧口 敦子大波は砂浜連々続くる沖行く船の見えかくれる
- 津屋崎 佐々木和彦農道を致してある児童らに黄の傘多く速めにも映ゆ
- 武丸 中村さつき昨夜一夜降りたる雨に貼り付き寝違ひき寄す境内に來て
- 名古屋 小田 喜一アルバムの覗せし写真に七十年過ぎ去りし頃のいくつか見ゆる
- 曲 天野 玲子ついで咲き藤も匂ひて参道は若葉目にしむ宗像大社
- 自由ヶ丘 調 貞子夕焼けに真冬の空に広がりて枯木の枝を赤く照らしつ
- 吉留 高山 信子日の丸の国旗を建てむ家毎に清く明るくまじき旗
- ひかりヶ丘 藤原みさを里深きこにも人の活気あり正助の村舎を訪れて
- 福岡 池浦千鶴子夏草を引きたるあとの手の匂ひの香を水掬ひて洗ふ
- 日里 大和美由紀耕せし畑に藪翳れて春の夕陽に砂浴びてをり
- 自由ヶ丘 津江富美子貝塚の刈り込みなせる道ゆけば青き匂ひの風にのりける
- 自由ヶ丘 細川 絹子一人住む老が折し隣り家の庭にチューリップの花咲き盛る
- 土穴 瀧口 敦子山裾に手の群れが延々と大草原をゆつくり動く
- 吉留 白木うめの咲きつぎははらりと散りくる桜でな今年われに花の以てゐき



境内の樹木が新緑の香り漂う最中の去る、五月十九日(日)午前八時より十九本アマチュア将棋界の最高峰である「宗像王位」の座を競う、第十九回宗像王位

宗像王位戦

早咲誠和 六段(大分県) 22歳 三連覇の快挙

戦(主催)宗像大社・西日 本新聞社、主管)日本将棋連盟福岡支部、後援)西日 本将棋連盟・宗像市町村長 会・テレビ西日本、日 本将棋連盟より、森下卓八

段を審判長として迎え、宗像大社斎館に於て開催された。出場選手は九州・沖縄・後地区各一各計六名の各県で予選を勝ち抜いてきた代表(各三つ)と、前年度王位の二十三少で、最年少の溝口 段(大分県)を始め、高校・大生・社会人等多士、初出場九名、かつの古位、準王位、三位

は大会最多記録である。各県代表の選手ならびに戦績は左記の通りである。

各県代表選手名

大分県	哲巳	四段②
大島	秋峰	四段③
宮崎	智晴	二段④
伊豆	義	四段④
大城	康浩	三段④
山口	公二	六段⑥
北村	雅彦	四段③
以上	二十三名	

対局成績

一回戦	才田五段 — 伊倉堂四段
二回戦	下平五段 — 小田五段
三回戦	釘崎四段 — 吉富四段
一回戦	早咲六段 — 北川四段
二回戦	才田五段 — 瀬戸口五段
三回戦	白石四段 — 釘崎四段
一回戦	早咲六段 — 才田五段
二回戦	白石四段 — 下平五段

準決勝戦

早咲六段 — 白石四段
早咲六段 — 白石四段

決勝戦

早咲六段 — 白石四段
早咲六段 — 白石四段

注:上段は勝者、三位決定戦はなし、準決勝戦の敗者、各三位

のまで探ることは容易ではないが、本紙に掲載された十三名の作文を読んだだけでも、考へさせられることが少なくない。

五十二歳の主婦の「おまじな」は、高校の受験をまへにお守りをどぶに落とした娘をつれてケン直しに神社へ参る母親の心づかひを表現したのだが、「ほとんどの人が、まだまだ楽しんでる頃だ」というのに、神社

はすでに掃き清められ、お灯明があげられていた(以下原文のまま)とか、「来るものこぼすの神社が、あちこちに点在している日本という国のありがたを、つくづく感じていた」という、神社の基本的なありがたや存在に安らぎを覚え、家族の人生の節目にはいつも神社にお参りしてきたといふ日本人の生活の道としての神道が語られてゐる。それは、三十六歳の主婦の七五三に

疑問であり、それにかかはる教化のありかたが問はれてゐるやうな気がする。六十七歳の男性の「神様、許して」や四十二歳の男性の「拾った一円玉」は、少年時代に誰も経験したやうな神社やお祭りでの思ひ出であり、そのささやかな事柄が意外にも生涯を通じて心の止まり木のやうな意味を持ち続けているといふことであらう。

子供たちの寄せた作品は、どれもみな生き生きとしてゐる。「わたしのおまつり」といふ風神太鼓の稽古に励んでゐる八歳の少女の文章は、太鼓のリズムのやうに弾んでゐる。書きながら、太鼓を通して参加することのできるよさ、喜びが随分とくるからに違ひない。子供が、子供が、子供が、こぶお祭りこそ、祭りの伝統が継承される要因であらう。しかし、過疎の町や村では若者も子供も少なくなつて、祭りの活気が失はれてゐる。いふ運動があつたの思ひ出す。その再生

神社の近くに住んでゐて、「私は神社っ子」と自称する十二歳の少女は、祭祀舞の練習が楽しく、それを教へてくれる神職夫人がソング歌手で、友だちとファンクラブを作つてゐるといふ。魅力ある人柄が偲ばれるやうで、まさに「あつたか神社」と少女が表現するやうな雰囲気があるのであらう。杜家に生まれた十三歳の少年が父君の勧めで祭典を手伝つたときの気持ち、「あこがれの神楽」の笛を習ひ始めるときの様子に、ほほのとした共感を覚える。(神社新報)

汽車は砂漠の中へ中へと走り出し、見渡すかきり完全には礫と岩の高原となつた。日射しも増々強まる。砂漠の中の町も人家もない所で、突然駅舎を始めとする諸々の建設中の建物が現れる。その下に輸送中継地・補給所が建設中である。



北川六段 — 増水五段
江頭四段 — 下村五段
田代五段 — 矢野五段
片野田五段 — 藤本四段

北川六段 — 伊ヶ崎四段
石川四段 — 田代五段
北川六段 — 石川四段

「鎮守の森とおまつり」をテーマに作文を募集したら、四歳から九十四歳まで二千六百六十名の応募があつたといふ。神社への関心が薄らぎつつあると思はれる時代に、ほつとさせられるやうな朗報だが、神社界がかうした方法で神社やお祭りへの人々の思ひを知らせようといふことさへ種だつたのではあるまいか、といふ気がする。神社への関心が薄らぎつつある時代と私も書いたが、その実態はどうなのかと問はれたら、即座に答へることは案外むづかしい。しばらく考へてからいくつか具体的事例を挙げることはできても、その中には神職の立場からさう思ひ込んでゐるといふものがある。時代の風潮として皮相的に扱へてあるものがあるかもしれない。地域の人たちが神社やお祭りなどのやうな意識を持ち続けているのか、といふことを知らずして神社のありかたや教化の問題は論じられないはずで、潜在的にあるもの、変化しつゝある傾向、共感を呼ぶもの、馴染まないものといつても

は、数回も出場のベテラン勢に三連覇をかけた早咲六段、天分恩により対局が競われた。

ふと、このころの日本人は私の祈りのためには神社に参拝しても、公の祈りのために参拝するといふことはあまりないのではあるまいか、と思つた。

疑問であり、それにかかはる教化のありかたが問はれてゐるやうな気がする。六十七歳の男性の「神様、許して」や四十二歳の男性の「拾った一円玉」は、少年時代に誰も経験したやうな神社やお祭りでの思ひ出であり、そのささやかな事柄が意外にも生涯を通じて心の止まり木のやうな意味を持ち続けているといふことであらう。

汽車は砂漠の中へ中へと走り出し、見渡すかきり完全には礫と岩の高原となつた。日射しも増々強まる。砂漠の中の町も人家もない所で、突然駅舎を始めとする諸々の建設中の建物が現れる。その下に輸送中継地・補給所が建設中である。

一誌一話 (53)
中国調査紀行 (16)
樂 杏 子

第十回 巡拝記

四国路の古社をたずねて

＝式内社 顕彰会九州支部＝



梅前線北上中の六月十一日、式内社顕彰会九州支部巡拝会一行は午前十一時二十分広島三原駅に集合した。

今年第十回巡拝会を記念して、四国路伊予・讃岐ノ国七社詣を企画して、山加を募った。九州各県、山口県、東京方面よりの御参加もいただき、総員二十九名である。

三原港より「サンロマン」号に乗船、霞深き瀬戸内海を一路大三島に向う。海上に浮ぶ島々も霞の中で墨絵の様である。船中で昼食を取り、正午、三島宮司のお出迎えを受け、大山祇神社に正式参拝する。

大山祇神を祭る社は天下に名高き大神社で、伊豫國一の宮である。また日本一の甲冑・刀剣を所蔵する神社として知られている。国宝館を拝観し再び「サンロマン」号に乗る。小雨が瀬戸の海を洗い、遠近の鳥影がさらに一幅の名画と変り、四時、松山観光港に入る。

初めての四国路入りの人からぬ、西も東も地名も分る。案内されて松山市道後に入ると、伊佐爾波神社野口宮司のお出迎えを受け、正式参拝する。別名湯月八幡宮とも呼ばれている名社で、宗像三姫神も祭られている。

一行はここで思わぬ方角の出迎えを受けた。山田紅衣（まのやまのこうい）先生は松山の有名な歌人であり、知る人ぞ知る歌人であり、画家であり作家である。昭和六十一年に愛媛新聞に掲載された随想集「犯犬春秋」を出版されたが、その中に絶版となり、再版が待たれている。この山田先生が師の歌碑を、伊佐爾波神社に建立し、顕彰会、歌人である式内社九州支部長兼父宮司の奥様（さかきつと）とも知人親友の仲に入り、四時、松山観光港に入る。

同行者で伊佐爾波神社野口宮司のお出迎えを受け、正式参拝する。別名湯月八幡宮とも呼ばれている名社で、宗像三姫神も祭られている。一行はここで思わぬ方角の出迎えを受けた。山田紅衣先生は松山の有名な歌人であり、知る人ぞ知る歌人であり、画家であり作家である。昭和六十一年に愛媛新聞に掲載された随想集「犯犬春秋」を出版されたが、その中に絶版となり、再版が待たれている。この山田先生が師の歌碑を、伊佐爾波神社に建立し、顕彰会、歌人である式内社九州支部長兼父宮司の奥様（さかきつと）とも知人親友の仲に入り、四時、松山観光港に入る。

主基地方風俗舞保存会研修旅行
主基齋田跡を訪ねて
五月十一日(土)十三日(月) 一泊二日の日程で恒例の、主基地方風俗舞保存会研修旅行を行った。
本年度は、会員十四名が参加し、車二台に分乗し午後一時、宗像大社を出発。昨年の役員改選に伴い、田中保政氏が会長に就任して、初の研修旅行という事もあり先ず、主基地方風俗舞保存会の原点ともいえる福岡市早良区脇山村の主基齋田跡へと足を運んだ。
天章陛下が御即位されるにあたり、一世一度の重要御儀として京都御所紫宸殿に於て国家最大の祭儀とし

て大嘗祭が斎行される。この祭儀に際し、新穀を奉獻する齋田の卜定が宮中で行われ、古来より京都を中心として西方の国(主基地方)・東方の国(悠紀地方)とに別れ齋田が卜定される慣しとなっており、大嘗祭大宴宴にのみ披露される風俗舞を風俗舞と称し、内外不出を原則として、大嘗祭の終了後は消滅してきた舞である。
昭和天皇が御即位されるにあたり、主基地方に選ばれたのが福岡市早良区脇山村であり、脇山村の産土神、横山神社で成就祈願祭が斎行された。
その後、この風俗舞が後世に伝承出来ないものかと働きかけが進み、横山神社が宗像大社の分社であった

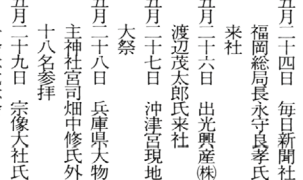
同(亀甲三)字である。星野宮司さんご縁代さん達の手で境内は美しく清められて行く。その中で本日より同行される山田先生が犯犬の前後でスケッチされる姿が見られた。
伊予豆比古神社は別名「椿さん」と呼ばれ参拝者の多い名神社である。昭和の御世に再建された拝殿は総棟造の荘厳な建物で、正式参拝を終り、長官我部宮司さんのお話を聞く。この拝殿を立てる頃は松より樺が安かつたとの説明に一同「ほんま」と感嘆する。
十時半、一行はバスで香川県へ出発する。雨は丈夫の横た、トンネルの多い自動車道で名ガイドの案内も車窓をよぎる風景を取りにいく。さき、豊中J.Cを下り昼食後、高屋神社に参拝した。稲積山中腹にある遙拝所より山上の本宮を拝す。西田宮司、総代さん達の心あたたまる出迎えを受け、当宮神饌の原種米、黒米、赤米で造られた餅、あま酒を立派に盛り、とても茶の木で囲われた垣根と記念碑が往時を偲ばせていた。又、公園の横には公民館があり、そこには当時の資料が保管されており、公民館長さんの御好意により拝見させて頂く事が出来た。
齋田跡を見学後、北山タムを経由して嬉野に入った。嬉野の温泉で汗を流しその夜、会員相互の懇親の和を広げた。
翌朝、旅館を出発して、先ず、佐賀県の祐徳稲荷神社を正式参拝。伏見、豊川稲荷と並んで日本三大稲荷の一つに数えられ、新緑に覆われた石壁山を背に、高さ十八メートルの柱が支える朱塗りの本殿が山中に鎮座し、随所に佐賀県特産の有田焼磁器が用いられて、



直会の贅を受けた。一同敬神崇祖の念深き人々の真心に感謝して下山する。四時、田村神社に詣ると、高松一ノ宮である名神社で境内も広い、池田宮司のお出迎えを受け参拝を終る。境内で記念撮影のあと、公務の帰られる上杉宮司を見送りバスは塩江温泉へと走る。高松の奥座敷と呼ばれる塩江温泉は山間のしずかな名所でもある。新権川観光ホテルに二泊目の旅装束とく、別れの饗となる夕食会も一同楽しく当会の名物である「タンコ節」の歌舞で終った。
十三日、午前九時半、志太神社を参拝する。大川郡志太町鴨部の山中に鎮まるとは、しずかに昔を偲ばせる古社で、園師宮司が田下さった。参拝後のお話の中に山村の名社を守る苦労話があった。
すべての巡拝を終り屋島の高台で昼食を取り一路瀬戸大橋を渡る頃には快晴と

装いを凝してあり、とても立派である。
参拝を終え、次に柳川へと向い、昼食を兼ねて川下りを行った。
柳川は北原白秋の里として有名だ。その歌碑が川下りコースの所々に建立されている。瀟湘立花邸を中心として、二行は船頭さんのユーモアあふれる案内と、名物のセイロ蒸しに舌鼓を打ちながら和やかな、ひと時を過ごした。
川下りを楽しんだ一行は城島町の酒蔵を見学して、一路宗像へと向い、帰郷。かくして今年の主基地方風俗舞保存会研修旅行も、実りの多い旅行であった。

夏越祭・大祓神事御案内
暑さも毎日厳しさを増してまいりました。さて、恒例の夏越祭が近まっています。このお祭りは、大祓神事を中心に行われ心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちをもって明日の生活を安らかにするための祈りをこめたお祭りでもあります。
本年も左記により斎行致しますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいませよう御案内申し上げます。
七月吉日
宗 像 大 社
宗 敬 者 各 位
記
夏越祭
一、七月三十一日 午後五時、大祓神事、引続き宗像大社形代について
二、宗像大社形代について
宗 像 大 社 形 代 について
宗 像 大 社 形 代 について



当大社では、古く一千数百年前から、交通安全や身体安全を祈って多くの人形・馬形・舟形などがお供えされております。この人形は、宗像大社が道主貴、あらゆる道の神様として多くの人々から厚く信仰されていた永い歴史を物語るものであります。

社務日誌抄
五月一日 月次祭
五月十日 京教女子大学学芸員実習生二十五名来社
五月十一日 宗像大社社会計監査
五月十二日 宗像大社学生会議員会
五月十三日 宗像大社女子会議員会
五月十四日 秋山幸衛夫妻参拝
五月十五日 月次祭
五月十九日 コロラボトロンク(株)東福岡営業所参拝
五月二十日 三宮建設機工(株)主任社長外四十九名参拝
五月二十一日 五色宗像会参拝
五月二十二日 多度神社職員一行参拝
五月二十四日 毎日新聞社福岡総局長水守良孝氏来社
五月二十六日 出光興産(株)渡辺茂太郎氏来社
五月二十七日 沖津宮現地大祭
五月二十八日 兵庫県大物主神社宮司畑中修氏外十八名参拝
五月二十九日 宗像大社氏子会総代総会
五月三十一日 宗像大社責任役員会
六月一日 宗像大社責任役員会
六月二日 宗像大社責任役員会
六月三日 宗像大社責任役員会
六月四日 宗像大社責任役員会
六月五日 宗像大社責任役員会
六月六日 宗像大社責任役員会
六月七日 宗像大社責任役員会
六月八日 宗像大社責任役員会
六月九日 宗像大社責任役員会
六月十日 宗像大社責任役員会
六月十一日 宗像大社責任役員会
六月十二日 宗像大社責任役員会
六月十三日 宗像大社責任役員会
六月十四日 宗像大社責任役員会
六月十五日 宗像大社責任役員会
六月十六日 宗像大社責任役員会
六月十七日 宗像大社責任役員会
六月十八日 宗像大社責任役員会
六月十九日 宗像大社責任役員会
六月二十日 宗像大社責任役員会
六月二十一日 宗像大社責任役員会
六月二十二日 宗像大社責任役員会
六月二十三日 宗像大社責任役員会
六月二十四日 宗像大社責任役員会
六月二十五日 宗像大社責任役員会
六月二十六日 宗像大社責任役員会
六月二十七日 宗像大社責任役員会
六月二十八日 宗像大社責任役員会
六月二十九日 宗像大社責任役員会
六月三十日 宗像大社責任役員会

宗像大社歌会 俳句作品集 三九七

福岡森 清
若葉雀吸ひこむ軒端かな

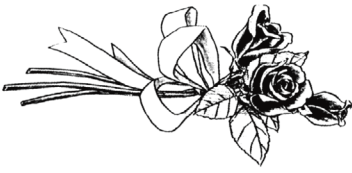
自由ヶ丘 細川 綱子
ブラウスの乾きてゆるる五月晴

津屋崎 井浦 良介
玄界の没りに揺れる一つの帆

日里 花田いつ枝
山里に午鐘の鈴青蛙

福岡中央 山下しづえ
餌撒けば寄って来るくる池の鯉

藤沢 井上 玄洋
翡翠の水を狙ふ影一閃



(続)

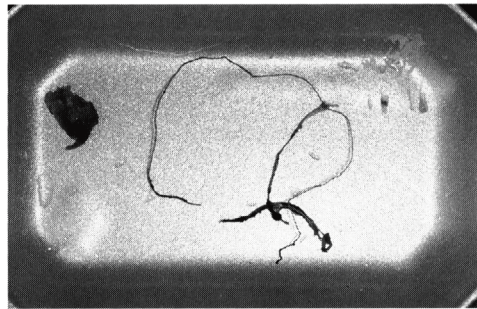
決の寄物

107

いししいただし

連休が終わり、やっと落ち着いた感じの五月十日、曇天のあまりはつきりしない空模様だったが、いつもの通り福岡花見浜に出てみる。

連休が終わり、やっと落ち着いた感じの五月十日、曇天のあまりはつきりしない空模様だったが、いつもの通り福岡花見浜に出てみる。刈目は川が流れての通り福岡花見浜に出てみる。刈目は川が流れての通り福岡花見浜に出てみる。



刈目は川が流れての通り福岡花見浜に出てみる。刈目は川が流れての通り福岡花見浜に出てみる。刈目は川が流れての通り福岡花見浜に出てみる。

に付着している。アカウミガメは甲長六センチ、死後あまり経過していないようで、大ききも手頃で、解剖をして標本をとろうと家に戻って用意を整えた。手袋、雨合羽、長靴、解体用に大型ナイフ、ノコギリ、計測のメジャー、写真機、ビニールの小袋も多用意図した。

り、汚水処理をした臭気が漂って不快である。近年益々ひどくなっている。満潮時には海水が逆流して、海からのビニールやプラスチック、発泡スチロールが河口付近から二百メートルぐらいたままで埋めつくすこともある。満潮の時には河口付近にイナが真黒になって群れている。

刈目川に架る小橋を渡ってすぐ下を見たら、波消ブロッタのところに、ブロッタと同色の円盤状のものが割れたものと思っていたら、どうも海亀らしい。階段をおりて近寄って見ると、アカウミガメだった。表面にうすく海藻が付着している。ブロッタも海藻が付着したロムサキイガイやフジツボが常時潮のつかるところ

清らかな感情をそっとしまい合っていた。やがて貴公子は無事にその任務をはたしたが、恋しい織工女の方は宗像神社に奉獻せられた。以来、貴公子は織工女の無事と大神へのつづがなき奉仕を祈りつづつた。その日々に堪えていた。そんなある日、神社に天女が立ちのり、宗像の神といふ。宗像の中津の宮に行くがよいとおつげにいられたという。半信半疑ながら、貴公子はお眼をいだき、中津宮に申し仕える身となった。しかし、海を隔てたところに織工女がいる。そう思う事で動揺する己を試されるのか、様々な不安と、妄想が襲ってきた。それらを

る直前のものがあつたので、それもビニール袋にとった。体内には、ほとんど残存物はなかつた。他に内臓部の炎症や傷みもないものはないうように感じられた。内臓部はすべて背甲部からとり去り、作業は終わった。背甲と腹甲は近くの松林に運びあげ、落葉をかけた近くにあつたビニール袋のたまり等をつけて、一年間ほどこ置いておけば標本がとれる。また頭部は海水の寄らない砂地に標識を置いてこれも標本をとるために埋めた。

持ち帰った胃の中のもの、排出口のもの、早速内容物を調べた。胃の中にあつたものは、海草で、ミル類の臭気は大変なものだつた。胃、腸等を確認しながら、胃の部分、腸の部分を探るが、胃にはあまり物も残っていないが、黄色の未消化のものがあり、その中にナイロン糸やビニール系の切れはしがあつたので、持ってきたビニールの袋に入れてまた排出口の部分に排使す

は目度よく結ばれ、郡内の某所に住んだとも、結ばれたこと、遠い所に移り住んだともいわれる。また、奴隷に住み、後に織殿神社に祀られたともいわれ、織殿神社由緒等の文献によると、応神天皇の御代、阿知理王(あちのおみ)が只國に使用して筑紫を求めた時、供進する用具としての、瓶子、盃、平釜・高坏(三辺)などがそれぞれあり、これらの用具のミニチュアも同様に作られて供えられているわけである。

つまり日常の祭りや、例大祭等を兼ねた全ての祭祀に供えられている神饌類を供進する用具としての、瓶子、盃、平釜・高坏(三辺)などがそれぞれあり、これらの用具のミニチュアも同様に作られて供えられているわけである。

この様なことが祭祀で行われたのが、沖ノ鳥の祭祀では七世紀後半代にあたる吾妻集で、その様相がよく、表現されている。

宗像大社

(24)

五号遺跡の出土品には金銅製雛形長頸壺(瓶子型)、金銅製雛形高坏(三万型)、金銅製雛形盃、また金銅製雛形紡錘具(金銅人形(形代)などの祭祀神玉を見ることが出る。奉獻品への変化は土器類にも表れてきている。前段階の祭祀の時期に至って土器が奉獻品として姿を表しているが、ここでは種

雛形奉獻品を作る為の材料は、銅板を地金として用い、切り金細工を行なった後に、鍍金を施しているというような、工作方法へと切り変わってきている。

祭祀奉獻品の雛形品への変化は、数々の祭祀用の神玉類だけではなく、後の祭りの様式にみられる様に、供え物を弁備する祭儀用具にあたる器器も同様に雛形品を作り、これも併せて供え物としてきているのである。

類多様化し、また大形化して供えられてくる。土師器の壺、長頸壺などと、一緒に、須置器の盃、瓶子、長頸壺、小形の高坏等である。これらの土器類は神饌類を弁備、奉獻する用具として使用されていたと考えられる。

たかにはどの容器に神酒を神水を饗水、塩を魚を海菜を野菜を果物をと配備し供えられていたかは、上古のころとして不明であるが

この時期頃から神饌供献の容器として使用されてきたことと思われる。金銅製人形(形代)と鉄製人形(形代)が出土している。四体奉獻された金銅製の人形は、いずれも一ミリぐらいの厚さの薄い金銅板を切り抜いて作られている。それよりも大きき異なり、欠損部もあるが、長さ七八四・五センチ、幅一四一〇・八センチを測る。

形は両腕・両脚を鉄で切り出し形づくりに張り肩とした上に顔も頭も作り出して、脚を開いた天人の顔は製して叩き込み込みをつけ、目・口・鼻を完全に表現している。人形については、「肥前風土記」佐藤の条で「荒ぶる神がおり行き来をまたげる為下田村の式形、馬形を作つて神に祀ると通れるよらなる」と巫女が神託を伝えたと言つて田の土埋人形と馬形を作り神土奉ったところ安全に通じきりようになつた、と記されている。ここに形代を奉獻する祭祀の一端が窺える。

この事例に船形を加え奉じてることで、沖ノ鳥祭祀が海菜を野菜を果物をと配備した祭祀であったかがよく表されている。

天の川異聞

宗像むかしばなし

筑前大島の南西、丁度中程に宗像大社中津宮が鎮座ましまし、その脇を小さな川が流れている。水の清きは天の真井とも今でもみそぎと聖水の場として知られる。天の川の両端には北方の角に末社牽牛神社が、南方の角に末社織女神社が祀られている。

この社が何時頃祀られたか、その信仰がどのようなものであつたか確かなないが、石見女式體に「筑前大島と云所に星宮と有。

川を隔てて宮有。北をば彦星宮と云、南をば七夕宮と云也。男を申者は彦星の宮に籠り、女を申者は七夕の宮に籠る也。七月一日より七日迄籠りて、川中に三重の棚を結て星祭をして、三の手洗(たらい)に水を入れて影を見るに、何れも逢ひき男の姿手洗にうつれば其男に逢ふべきと知也。云々」とみえ、古今集茶抄に同じような事が見えるところから、少なくとも鎌倉時代より遙かに古く、中央に迄浸透していた程根強い信仰

であった事がわかる。古老によると、今は語る人も少なく、天の川の話を薄はなりとしか知らないが、何でも遠い遠い昔の事がある貴公子が朝廷の命により海を渡り、ある国から数人の織工女(きぬめひめ)を求めて来たという。その使の貴公子は長い旅路のうち、いづしか織工女の一人と心を寄せ合っていた。大事な使命の途上のこと、語り合うことすらなかつたが、互いの目はそれぞれに語り合い、胸と胸に深

清らかな感情をそっとしまい合っていた。やがて貴公子は無事にその任務をはたしたが、恋しい織工女の方は宗像神社に奉獻せられた。以来、貴公子は織工女の無事と大神へのつづがなき奉仕を祈りつづつた。その日々に堪えていた。そんなある日、神社に天女が立ちのり、宗像の神といふ。宗像の中津の宮に行くがよいとおつげにいられたという。半信半疑ながら、貴公子はお眼をいだき、中津宮に申し仕える身となった。しかし、海を隔てたところに織工女がいる。そう思う事で動揺する己を試されるのか、様々な不安と、妄想が襲ってきた。それらを

る直前のものがあつたので、それもビニール袋にとった。体内には、ほとんど残存物はなかつた。他に内臓部の炎症や傷みもないものはないうように感じられた。内臓部はすべて背甲部からとり去り、作業は終わった。背甲と腹甲は近くの松林に運びあげ、落葉をかけた近くにあつたビニール袋のたまり等をつけて、一年間ほどこ置いておけば標本がとれる。また頭部は海水の寄らない砂地に標識を置いてこれも標本をとるために埋めた。